

泥んこ遊び

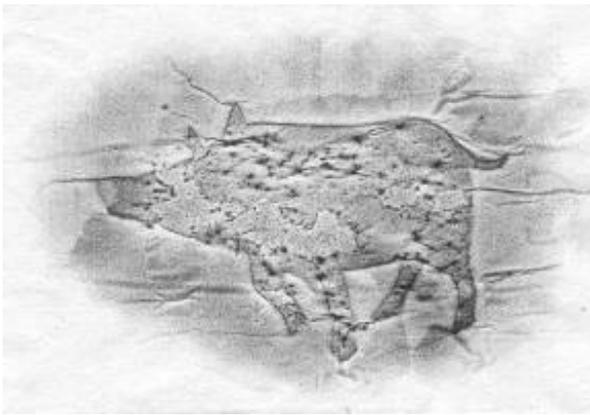
火あそび

そのI



土の時間

ここ2、3年猪の被害が増えてきている。ジャガイモやサトイモなど狙いがはっきりしている物はこちらも悔しいながら納得したり、対策を立てたりしてみる。ところが土手やミカンの木の根元とか、全く食えそうな物のない所を掘り返して行く。自然薯を食っている、ミミズだ、いや根っ子だ、諸説あるがどれも見当外れなご意見なのだ。そんな所には自然薯もミミズもいないし、ミカンの根にもかじられた痕跡は何もない。子供が屈むとスッポリ入りそうな大穴をあけ、猪は何をしているのだろうか。土は猪に何を提供しているのだろうか。いまだ謎は深まるばかりなのだ。



土が猪に何を与えているのかは分からないが、私にはいろいろなものを与えてくれる。ソールの薄い、安物の靴で土を歩くと散歩の楽しさが倍増する。踏み固められて固い土、その脇のふわふわな土、ちょっと小石が混じりゴツゴツした感触、落ち葉をカサコソ踏む音、腐植が進んで踝くらいまで埋まってしまう黒ぼく土、森の奥へと入るにつれ厚く繁茂している苔の軟らかいけど跳ね返ってくる感覚、そこから水がジュッと溢

れてくる感じ、藪の中を雑草を踏んで行く時の青臭さ、私の平らな足裏が歓喜している。

土とは本当に不思議な物だ。崩れて剥き出しになった崖の土を指にとって丸めながらいつも思う。水をくれてゆっくりと日を浴びると植物が育ち、水をくれて急激に火を与えると焼き物ができてしまう。なんと幅のある素材なのだろう。とても一筋縄ではいかないが、ふところ深く受け止めてくれる。焼成は植物が育つのに比べればほとんど瞬間なのかもしれないが、その短い時間の中できつと色々育てているのだろう。

しかも土自身は植物が育つ土に、あるいは焼き物ができる土になるのに何億万年もかけているのだ。猪がどうして土を掘り返しているのか、私がどんな焼き物を作れるのか、そう簡単には教えてくれそうも無い。

2002年4月

子供のころ叱られたことの1番と2番は火遊びと泥んこ遊びだった。それで叱られたことの無い幸せな子供時代を過ごした人や、或いは特殊な環境に育った人を私はまだ知らない。焼き物はそれが大威張りでできる。一度始めると止められなくなるのも道理というものだ。

人が生きていく時、手の打ち所というものは無数にあり、色んな場面で手を打って生きている。同じ様に人がやる物作りにも手の打ち所が色々ある。私は焼き物を始める前は模様師（手描友禅染）をやっていた。手描友禅染は極端に手の打ち所が少ない。初めから終わりまで1回づつしか手を打って行くことができない。下絵を描いた時に既に出来上がりの着物のイメージを作り、頭の中で彩色も全て終え、着物を着ているところまでイメージできて初めてうまくいく。厳しい1本道を確実に終わらせて行かなければならない。地色を変えて同じ模様を作る時でも、別の1本道をまた頭に描くことになる。

それが嫌だった訳ではないが、焼き物はといえば手の打ち所に事欠かない。特に陶器、炆器は一步ごとと言えるほどだ。もちろんここでも1本道をイメージしてもいいのだが、無数にある脇道を散歩する楽しみを放棄する気は私にはさらさら無い。迷子になるのもいとわず、せっせと横道、裏道へと散歩の足を伸ばす。中でも土探しを始めると、そこはほぼ獣道になってしまう。どこへ出るか見当も付かず、ただウロウロするばかりで、ハッと気付くと探偵団バッジも役に立たず、ただの泥んこまみれの迷子になってしまっている。

伊豆は温泉の熱水的作用を受けた粘土があちこちにあり、探し始めればきりが無い。しかも地球時間からすれば比較的短時間でできたそんな粘土は変化があり過ぎて、なかなかこっちの言い分を聞いてくれない。奇抜に焼けてもそれは粘土の勝手なのだ。その強烈な焼き上がりだけを前に出し、どうだすごいだろうと開き直ることもなかなかできない。そうかと言って、なだめすかして大人しくさせても、何かショボくさくて原土に申し訳ない気分になってきてしまうのだ。



そんな時、裏の畑の土手で自然薯を掘った時の土の感触を思い出した。強収縮するなんとも使えない土だった。器量は悪いがそのシャイでキュートな感じに引かれ、付き合ううちにいい味が出せるようになったのが*「うたかた削り」に使っているガサツとした土なのだ。

この畑土の中の道はどうなっているのだろうか。この道はどの道を行っても袋小路にならないのがまことにうれしい。

2002年11月

*画像のような底の削り方を「うたかた削り」と名付けました。ブクブクと湧き上がる泡のように削り出します。

草刈り

久し振りに草刈りをした。したと言うかぼうぼうの草に囲まれてせざるを得なくなってしまうった。

ツーサイクルエンジン用にガソリンを20リッターも買ってきてしまい、それも使わなければならない。だいたい1リッター買って20リッター買って単価は変わらないのだから5リッター位でもよかったのだ。山の中にいると町に下りて何かするのが面倒くさくなって、ついまとめ買いをしてしまう。

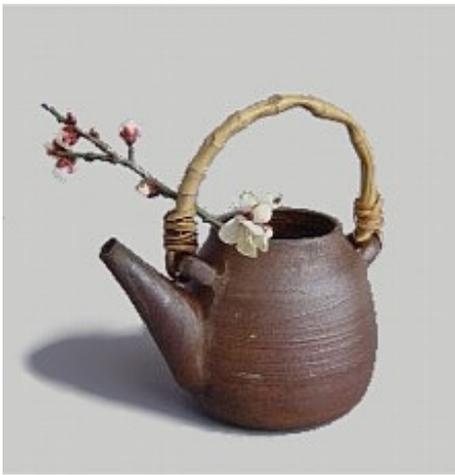
ガソリンに賞味期限があるのかどうかはよく分からないが、置いておけば劣化はするだろうし、第一に危険だ。心に無用の葛藤をさせる前に速やかに処理するにこした事は無い。

刈り払い機のエンジンをかけるのも随分しばらくぶりだが、10回くらい紐を引くと機嫌よくなってきた。本人も上機嫌で右に左に振り子運動させながらどんどん刈り進む。

伊豆は気候が合っているのか姫竹という太さ3、4センチの竹があっという間に繁殖していく。その竹を刈るために鋸歯のカッターを30分かけて入念に目立てをしておいた。鎌で竹を切ると足元に竹槍状に槍襖が続くことになり、辺り一帯、トラップを仕掛けたようなデンジャラスゾーンになってしまう。危険の無いように竹を鎌で切るにはテクニックと豪腕と、面積によっては並外れた体力が必要となってしまう。

目立てもしっかりできていて、草も竹もさくさく切れていく。気を良くしてついつい振り子の振幅が大きくなってしまった。気が付くと親指の皮が向け、軍手に血がにじんでいる。幾つになっても調子に乗る性格は変わらないようだ。

この姫竹はどこにでも侵入して根は張るし、竹の子は硬くて食べれないし、女子供じゃ歯が立たないし、畑でえんどう豆や胡瓜の蔓を這わせる事ぐらいにしか役に立たない。始末する手間に比べたら百害あって一利も無しというくらいの厄介ものだ。



しかしこの姫竹が役に立つ時がとうとう来た。土手から突き出て次の獲物を狙うかのように宙に曲がって力を溜めている根を見た時、こいつの落ち着き先が決まった。切って形を整えて乾燥させ、ひと月後には丁度焼き上がった土瓶の絃に納まっていた。

2003年9月

泥んこ遊び火あそび

<http://p.booklog.jp/book/32729>

著者：大門良一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uzuwa/profile>

表紙デザイン：セラ・カモン

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32729>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32729>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.